

答え合わせ・解説

| | | |
|----|--|--|
| 問1 | 答え 1 宋西 | 宋から帰国した際に禅の教えとともに茶を日本に持ち込み、のちに『喫茶養生記』を著して茶の効能を説きました。彼が伝えた臨済宗は、当時の政治の中心であった幕府の保護を受けたことで、鎌倉や京都の武士階級を中心に発展しました。 |
| 問2 | 答え 1 帝国によって広域の交通網が整備され、商人や使節の往来が容易になったことで、東西の文化交流や交易が活発になった。 | モンゴル帝国は、駅伝制（ジャムチ）を整備することで広大な領土内の安全性と交通の利便性を確保しました。これにより「モンゴルの平和（パクス・モンゴリカ）」と呼ばれる安定期が訪れ、マルコ・ポーロのような旅行者や東西の商人が活発に行き来できるようになり、火薬や羅針盤などの技術、さらには宗教や芸術がユーラシア規模で伝播しました。 |
| 問3 | 答え 1 幕府が朝廷を監視する体制が整い、幕府の支配力が西日本にまで大きく広がった。 | 承久の乱以前、幕府の支配力は主に東国に限定されていましたが、乱の勝利を経て、上皇側の領地を没収し、そこに多くの御家人を地頭として配置しました。これにより、朝廷の権威は低下し、幕府による全国的な支配体制が確立される契機となりました。 |
| 問4 | 答え 2 防衛戦であり新たな領地を獲得できなかったため、十分な恩賞を与えることができなかった | 元寇は外国からの侵略を退ける「防衛戦」であったため、これまでの国内での内乱とは異なり、勝利しても敵から奪った土地（恩賞の原資）が存在しませんでした。御家人たちは自費で武器や食料を調達して戦ったにもかかわらず、働きに見合う土地が得られなかったため、借金に苦しみ、幕府への不信感を強めていく結果となりました。 |
| 問5 | 答え 2 厳しい座禅や修行を通じて自己を鍛錬する姿勢が、武士の精神修養に適していたため。 | 禅宗（臨済宗の宋西、曹洞宗の道元）は、座禅によって自ら悟りを開くことを重視しました。この自分を厳しく律し、精神を統一する修行のあり方が、生死をかけて戦う当時の武士の気風や道徳観と一致したため、鎌倉幕府やのちの室町幕府によって手厚く保護されました。「念仏を唱えるだけ」というのは浄土宗や浄土真宗の特徴であり、禅宗とは異なります。 |
| 問6 | 答え 1 牛馬による耕作が普及し、米の収穫が終わった後の田で麦などを栽培する二毛作が西日本から広まった。 | 鎌倉時代は、灌漑施設の整備が進むとともに、それまでの人力に頼った作業から、牛や馬に農具を引かせて耕す「牛馬による耕作」へと技術が向上した時期です。これにより生産力が高まり、夏に米、冬に麦や大豆などを作る「二毛作」が西日本を中心に普及しました。こうした農業の進歩が、みその原料となる大豆の増産を支えました。なお、千歯こきや備中ぐわ、農学書の普及は江戸時代の特徴です。 |
| 問7 | 答え 1 北条泰時・時房が初代の六波羅探題に就任し、幕府による政治の拠点が京都にも置かれた。 | 六波羅探題の初代には、のちに執権となる北条泰時とその叔父である時房が就任しました。これは幕府にとってこの役職が極めて重要であったことを示しています。これ以降、六波羅探題は北条氏の有力者が務める重要なポストとなり、鎌倉時代の政治体制を支える柱となりました。 |
| 問8 | 答え 1 国ごとに置かれた守護が軍事・警察を担い、荘園や公領ごとに置かれた地頭が年貢の徴収や土地管理を担った | 源頼朝は、対立した弟の源義経を捕らえるという名目で、朝廷から守護・地頭を設置する権利（権限）を認めさせました。守護は旧来の行政区分である「国」ごとに原則1人置かれ、軍事や警察の役割を果たしました。一方、地頭は個別の「荘園」や「公領」ごとに置かれ、現地の管理や税（年貢）の徴収を実務的に担当しました。これにより、幕府の支配力が地方まで及ぶようになりました。 |